
無音の世界

秋原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無音の世界

【著者名】

N4567D

【作者名】

秋原

【あらすじ】

世界から消えた音。世界から音がなくなつた五年後の日常を話そ
うと思います。

ない
出ない
出せない
聞けない
聞こえない

何がなくなつたかという質問も、もう聞くことはできない。
その質問に答える術も、文字しか残されていない。
音がなくなつた。まつたくの、無音。

それは大きな大きな事件。

いきなり世界中で音が出せなくなる。出なくなる。

原因はわからない。大きな文字でそれがニコースに取り上げられた
ときは絶望した。たぶん、それは世界中の誰もが同じだつた。

なのに事件があつてから少しもしないうちからお偉い学者達が宇宙
の電波説や地球乗つ取り説なんかの馬鹿らしい仮説を真剣に文字で
討論し合つているのだから人間つてタフだ。

そんな事件があつても時間は止まらない。もつ、五年も経つてしま
つたのが嘘のように思える。頭のよさそうな学者達が五年経つても
まだ馬鹿みたいな仮説しか立てられていないのも嘘のようだ。
この五年間で生まれた説は数え切れないほどだつた。人間への神様
の天罰、もつと大きな何かの予兆、地球の最後…様々な説が飛び交
い、消えて、それからまた新しい説が生まれた。いくら繰り返した

つて本当の答えには辿りつけなかつた。いや、もしかしたら生まれては消えていつた数多の説の中に一つぐらい確信をついたものがあつたかもしれない。けれど、それは知りようのないことだ。そう考えると長年に渡つて議論していること自体が馬鹿のように思えてならない。

五年も経つと自然に無音にも慣れだ。時間はかかつたが、もう音を取り戻すことを諦めた、そういう人間からこの状況に慣れていつた。暫く粘つた記憶はあるが、この耳ももう何も聞こえないことに慣れてしまつた。もちろん、諦めない人間もいる。どこかでは音を取り戻すという怪しげな宗教なんかが戯言を言つて金を巻き上げているらしい。

音といふものはそれまでは改めて意識するものではなかつたが、なくなつてみると今までの生活にどれだけ深く関わつていたかがわかつた。それから、音がなくなつたことは思いもしなかつたような様々な場面で問題になつた。

世界には音が失われたことで意味をなさなくなつたものもあつたが、それに代わつて文字を使ったものが増えていつた。電話はなくなり、音楽はなくなり、文字が今まで以上に必要になり、視覚的娯楽を取り扱つたものが増えた。

もちろんこの五年の月日の中で生まれた子供も育つた子供もいるに關わらず子供達は無邪気に携帯用のパネルを突付き文字を使い会話をしている。そんな小さな子供が打ち込んでいると思うとパネルに浮き上がる文字も舌足らずに思えてしまうから不思議だ。まあ、この辺はただの先入観なのだけれども。正直、そんなことは無理だろうと思つていたからこれがニュースで報じられた時は信じられなかつたものだ。その様子を目の前で見た時は初めて生命の神秘というものを感じたけれど、今思うと少し違うな。

たまに、もしこの世界になくなつた時と同じように不意に音が戻つたら、と考える。そして音がなくなつてから生まれた子供達は「あ」をなんて読んでいるかわかつたもんじやない一人一人が好き勝手な

発音をしているのを想像すると自然とくすぐったい笑いが込み上げるのだがその後に子供達には音と言ひ概念すらないことに気がつく。音がなくなつてから、絶望するのはそんなときだ。音がなくなるまで知らなかつた絶望が今は少し身近に感じられる。嫌な気分だ。子供達には、与えられていないのだ、知るはずがない。親も説明するだらうし、子供もそれを見て頷くだらう。だけれども、文字だけの説明でわかるものではないのだ。

テレビが音もなくつけられる。母親が内線でメッセージを送つてきたからだ。音がなくなつた今電話というものは意味をなくし代わりに生活の必需品とも言えるテレビに文字の似たような機能がついたのだ。音が消えても、テレビはしつかり生活の必需品として留まつている。見ていると暇つぶしになるし、音が消える前からテレビ画面には字幕が飛び交つていたから完全字幕でもあまり違和感がない。テレビは、視覚的娯楽に富んでいる。だから、テレビにそんな機能がついたのだろうけど。母親からの怒つているのかそれとも機嫌がいいのかわからない文字だけのメッセージを読む。文字だけでは冗談も冗談として通じないことを知つていたので音がなくなつてからはテレビ電話みたいなものが普及するかと思えばそんなことはなかつた。何故だろうと考えてみると音があるからこそその電話であつて互いにパネルを打ち合つ映像を見ていてもなにも面白くないことに気がついた。それに、音があつた時も電話をするだけでいちいち身嗜みを氣をつけなければいけないのは面倒などの理由であまり普及しなかつたのだ。音が消えたとしても、その辺の理由は変わらないのだろう。

母親からのメッセージも読み終わつていつまでもその画面にしておくも馬鹿らしかつたからチャンネルを変え、なにか面白そうな番組はやつていなかとさらに画面を変え続ける。

そうするとアニメが目に付いた。このアニメの元になつた漫画を持っていたから見てみようと思ったのだ。画面には漫画をながらにふきだしが飛び交つてゐる。音がなくなつたことでアニメでしかでき

なかつた漫画の「ママからママへと移動するモーションはほとんどなくなり今のがアニメはただの動く漫画のようだ。それは、ふきだしを出すとそれを消すタイミングも必要になるからだろうな。それに、漫画とアニメの最大の違いだった音が失われてしまった為、漫画をわざわざアニメで見る意味も薄れてしまった気がする。もしかしたらアニメ存続の危機かもしけないと思ったが音を知らない子供はこれで楽しんでいるのだ。そういう子供はこれからもっと増えるだろうし、音を知っている者にとってはつまらないアニメはこれからも続くのだろうと思う。一度出したふきだしを消えて次のふきだしが出てくる画面を見つめながらため息をついた。この五年間で最も歳をとつたと感じてしまうときは前のアニメの方が面白かったと思ってしまうことだ。つい、父親のそう言つ声を思い出す。

そう、あと変わったと言えば、なんだろうな。

ああ、そうそう。ついに、というべきかついに、としか言い様がないのか、この前分厚い辞書から音という項目が消えた。音が消えてからその項目は需要のないものになってしまったらしい。需要のないものを辞書に載せていても仕方がないのだろう。そもそも、辞書から消えたからって音が戻つてくる可能性が消えたわけじゃない。けれどそれに対する人々の反応はその可能性を失ったかのようだつた。人とはそういうた意味もない最後の皆を意味もなく持つているものなんだろう。

それも知らずに無邪気に笑つている音を知らない子供達。

これでこれから先、もし音が戻つてきたとしても音の存在証明がまた一つ消えてしまつたことになる。

これから先すべての音の存在証明が存在価値が消えるのはもう遠くないことだらう。

(後書き)

終わりの部分をまたいつかとこつものから修正させていただきました。

ウルトラマンなどの単語が広辞苑に追加されるといつニコースを思い出し、必要ななくなつた単語は消えるのではないのだろうかと思つて書いてみました。まあ広辞苑には一度登録した単語は削除しないという方針があるそうですが、

ここまで読んでいただいてありがとうございます。

平成二十年四月六日 秋原

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4567d/>

無音の世界

2011年1月4日02時46分発行